ナ　　イ　　ン

井上　ひさし

放送局での仕事が思いがけず早く終わったので，四ツ谷駅前の新道にある中村さんの店に寄ってみた。中村さんは畳屋の主人である。店は小さいが裏手に大きな仕事場を持っている。東京で五輪大会が開かれた年の暮れから3年間，わたしはその仕事場の2階を借りていた。8畳の台所付き食堂に6畳が二間と4畳半，そのうえ広い風呂場と風通しのいいベランダまであって，家賃は月4万5千円だった。当時の相場の2割方は安かったと思うが，それはとにかくそれほどの間取りを上に載せることができるぐらい中村畳店の仕事場は大きいのである。その2階にいまは長男の英夫くん夫婦が住んでいる。

中村さんはスポーツ紙を眺めながら，茶筒に入れた煎餅をかじっていたが，わたしを見ると，

「ここへ来て，おやつをつき合ってやってくださいよ。」

と，針だこでたらこみたいに脹れ上がった指で火鉢の横の畳を軽く打った。スポーツ紙の見出しに誘われて話題は自然に野球のことになったが，そのうちに中村さんは急に膝を進めてきて，

「新道少年野球団は強かったねえ。」

ライオンズもジャイアンツも問題じゃないとでもいうような，力の入った口調で言った。

「なにしろ新宿区の少年野球大会で準優勝したぐらいだからなみの強さじゃなかったな。それも決勝戦を延長12回までたたかったうえの準優勝だ。つまり新道少年野球団は優勝したも同じさ。だいたいが優勝チームには投手が3人もいたんだからずるいや。ひきかえ新道には英夫が一人しかいなかった。しかも午前中の準決勝と合わせてぶっ続けで19回も投げ通したんだよ。それも真夏のかんかん照りのもとでの19回だ。英夫も，新道少年野球団も，ほんとうによくやった。」

「覚えていますよ，あのときのことは。こちらの仕事場の2階を借りて2度目の夏のことですから。」

「すると，あなたも外濠公園野球場へ詰めかけてきなさっていたロか。」

「いや，夕方，放送局から戻ってくると，ちょうどパレードにぶっつかったんです。」

J大学の学生が増え，近くに大会社のビルがいくつも建ったせいで，道幅4メートル，長さ100メートル足らずのこの新道は四谷で一番にぎやかな場所になった。もっとも軒を並べる店は飲み屋に食べ物屋に喫茶店のどれかに限られてしまい，客を迎えるだけの，厚化粧だが，なんだか素っ気のない小路に化けてしまったこともたしかだ。17，8年前と同じ店構えでがんばっているのは，新道入口のワイシャツ店と，小路の奥のこの畳店ぐらいなものである。当時の新道には生活があった。豆腐屋があり，ガラス店が，お惣菜屋が，ビリヤード屋が，そして主人が会社勤めの普通の家があった。四ツ谷駅のほうから新道を抜けようとする人は，ゆるやかな勾配の坂を登ることになるが，その坂の真ん中のあたりには歌舞伎役者の大和屋（十世岩井半四郎）の住まいもあって，夏の宵などには，白木づくりの玄関の前の，

狭いがよく打ち水した石畳の上で，大和屋が中学生のお嬢さん２人とよく線香花火をしていた。２人のお嬢さんはやがてよく知られた女優になるのだが，ひとことで言えば，そのころの新道は自足していたのである。たいていの日用品は新道のなかにある店屋で十分に間に合っており，それらの店屋はまた新道に住む人たちだけを相手にして，とにかく暮らしが立っていた。新道は，ささやかにではあるが，しっかりと自給自足しており，そこで小路全体に自信のようなものがみなぎっていた。いまはたしかに華やかな小路になっているけれど，外からやってくる客の懐中をあてにしないとやってゆけないというところが見えて，なんだかもろい通りになったような気がしてしかたがない。

「主将の洗濯屋の正太郎くんが，小さな，準優勝のカップを抱いて大和屋の前を通るところで，わたしはパレードに間に合ったのです。正太郎くんの横には英夫くんがいた。その後ろで７人が団子みたいにかたまって，くすんくすんやっていた。ビリヤード屋のおじさんが監督をしていると聞いていたのに，その姿がなかった。あれ，おかしいなと思った記憶があります。」

「ビリヤード屋の大将は決勝戦が始まるとすぐ暑気中りを起こしてひっくり返ってしまったのさ。60を４つも５つも過ぎていたんだから，これは責められない。それにしても監督なしで，あの９人，よくも12回までもちこたえたものだ。ほんとうに新道少年野球団は強かった。」

「大和屋がお嬢さん２人と出てきて，正太郎くんに御祝儀袋を渡した。その光景も覚えていますよ。大和屋が『よくやったねえ，お疲れさま。』とねぎらうと，それまでくすんくすんやっていた９人が一斉にわーっと泣き出した。」

「よほどくやしかったのさ。」

「あの９人はいまどうしていますか。もちろん英夫くんのことはよく知っていますが。」

「ばらばらになってしまったさ。」

中村さんはちょっと目を伏せた。

「一塁をやっていた洋品屋の明彦は大学を出て会社員になった。洋品屋は地所を売って千葉のほうへ引っ込んだ。明彦はそこから丸の内の会社に出ているそうだよ。二塁のお惣菜屋の洋一は新宿のホテルでコックをやっている。」

中村さんは新道少年野球団のナインのその後の消息によく通じていた。それによると，三塁のガラス店の忠くんはコンピュータ技師，遊撃の文房具店の光二くんは神奈川の中学校教師，左翼の豆腐屋の常雄くんは埼玉で自動車学校を経営しているという。

「この近くにいるのは右翼の魚屋の誠だけかな。誠は放送局の前で小料理屋をやっている。」

「豆腐屋の常雄くんが自動車学校の経営者とは意外でした。あのときはみんな小学校の６年生，つまりいま，やっと30歳でしょう。その若さで自動車学校を経営するなんてすごいじゃないですか。」

「タクシーの運転手をしているときに，そこの社長の娘に見染められたらしいね。で，その社長が自

動車学校の経営者でもあったわけさ。」

「なるほど。」

「そういうわけで，みんな新道から出て行ってしまったねえ。ここの地価は高い。3，40坪の狭い土地でも，処分すれば郊外に家を建てたうえ，びっくりするほどのお釣りがかえってくる。だから親たち競争で土地を処分してしまった。お釣りは老後の資金というわけだね。そうそう大和屋も若葉町のほうへ引っ越したよ。」

中村さんはなぜだか，洗濯屋の正太郎くんのことを抜かしてしまっている。新道少年野球団の4番打者で，捕手で，主将の正太郎のことになぜふれたがらないのか。

「正太郎のことは口にしたくないんだよ。」

中村さんはこっちの胸のうちを見抜いたように言った。

「あいつの名前を聞いただけでめしがまずくなる。英夫のやつ，あの正太郎のために畳を85万円分も騙し取られてね，そればかりか，おれが警察に届けようとしたら，『それなら僕はこの家を出て行きます。』なんて言って脅かすのさ。幼友だちをかばうのはいいが，それにも限度ってものがある。」

口にしたくないと言いながら，正太郎くんのことに話題が及ぶと，中村さんはそれまで以上に能弁になった。2年前の冬，ひょっこり正太郎くんが訪ねてきて，畳を注文したという。そのときの口上はこうだった。 ― 今度，練馬にある不動産会社で働くことになった。これまでいろいろと心配をかけてきたが，今度こそ性根をすえてやる決心だから，どうかご安心いただきたい。ところでうちの社は建売住宅をつくって売ってもいるのだが，出入りの畳屋がぐずな畳ばかりおさめてくるので担当者が弱り切っている。それを見て，会社に自分を売り込みたいという気もあって，つい，「畳なら僕におまかせください。」と請け合ってしまった。無理を申してすまないが，明朝まで建売5軒分の畳を都合してはくれまいか。 ― 中村さんはこの口上を眉に唾つけながら聞いていたという。正太郎くんが昔の友だちから寸借詐欺をして歩いているという噂を何度も耳にしていたからである。だが，英夫くんに「正ちゃんを信じてやってください。」と頼まれて，息子の親友のためにひと肌ぬぐ気になった。足りない分は同業者を回り歩いてかき集め，翌朝，トラックに乗ってやってきた正太郎くんに引き渡し，そしてそれっきりだった。

「あのとき，正太郎を警察に渡しておけば，豆腐屋の常雄もあんな苦労をしないですんだのにな。常雄は薬を飲んで自殺しかけたんだ。」

去年の春，正太郎くんは常雄くんの自動車学校に現れた。掃除夫でもいい，どうか雇ってくれという。そこで常雄くんは旧友を事務員にした。夏，正太郎くんは事務室の金庫から400万余りの現金を持ち出し，姿を消した。常雄くんの奥さんも同時に家を出てしまった。正太郎くんはいつの間にか常雄くんの奥さんとねんごろになっていたらしい。常雄くんは自殺を図り，間もなく奥さんがぼろぼろになっ

て戻ってきた。

「奥さんはよほどこたえたらしく，生まれ変わったようになって常雄につくしているそうで，それはめでたい。だがね，あの常雄が薬を飲む光景を思いうかべると，そのたびに涙が出てしかたがない。あいつは弱虫の８番打者でねえ，死ぬということを一番怖がっている子なんだ。その子が死のうとした。よほど辛かったにちがいない……。」

「それで常雄くんはどうしました。正太郎くんを訴えたんですか。」

「それがやはり正太郎のやつをかばうんだよ。警察へもどこへも届け出なかったそうだ。」

「新宿区少年野球大会の準優勝チームの主将だった子が，どうしてそこまで崩れてしまったんでしょうか。」

「それはおれにもわからない。ただ，洗濯屋はしょっちゅうもめていたからね，大将の女出入りで。そのたびにものすごい夫婦げんかになり，そのたびに正太郎のやつは家出をしていたねえ。」

「お父さん，畳の仕上がりを見てやってください。」

皮の肘当てを外しながら奥から英夫くんが出てきた。

「４時にはもう運び出さなくちゃなりませんから。」

「おまえが見て，それでよしということになれば，だれからも苦情は出ないさ。」

と言いながらも中村さんは息子が自分を立ててくれていることがうれしいらしく，身軽に立ち上がり，

「ちょうどいま，おまえたちが正太郎に大甘だって話をしていたところだ。それにしても新道少年野球団は強かったねえ。」

と奥へ入った。

「お父さんは間もくなく隠居しますね。英夫くんに一目も二目も置いているもの。いまのやりとりを聞いていて，そう思いました。」

「だとしたら正ちゃんのおかげかな。」

英夫くんは火鉢に手をかざした。右の指には針だこがいくつもできている。

「正ちゃんに85万円，騙し取られてからですよ，本気で仕事をするようになったのは。なんていうのかな，正ちゃんのつくった穴を一日でも早く埋めなくてはと思い，それで仕事に精を出すようになったというところかな。常雄にしても，正ちゃんを憎みながら，感謝しているところもあるだろうと思うんです。父は常雄のことも話したんでしょう。」

わたしはうなずいた。

「常雄の奥さんは家付き娘を鼻にかけた高慢ちきな女だったんですよ。それが正ちゃんと問題を起こしてから別人のようになったんです。正ちゃんは一見，悪のように見えるけど，やはり僕らのキャプテンなんですよ。結局は，僕らのためになることをして歩いているんだ。」

「決勝戦までいっしょになってたたかうと，そこまでチームメイトを信じるようになるのかな。うーん，わかるような気がする。」

「おじさんにはわかりません。」

英夫くんはわたしを見すえて言った。

「父にもわかりません。父は土手の木陰で試合を見ていただけですから。僕は中学でも高校でも野球をやっていた。高校３年のときは西東京大会の決勝まで行きました。でも，あんな思いをしたのは，あのときだけです。」

英夫くんの強い口調に気圧されて，わたしは少し体を引いた。英夫くんは軽く唸りながら言葉を探しているようだったが，やがてこう切り出した。

「口に出すと，なにもかも嘘になってしまうような気がするんですが，ええと，そう，準決勝も決勝も新道チームのベンチは三塁側でした。ベンチには屋根もなにもなくて，ただ，木の長い腰掛けが備えつけられているだけです。」

四ツ谷駅を新宿側に出て外堀通りをだらだらと市ケ谷のほうへ下って行くと三角形の公園がある。そこが外濠公園野球場だ。公園は外堀通りから一段低い堀を埋めてつくられている。当時は，野球場はまだ金網で囲われてはおらず，外堀通りから土手を下りて球場に立つことができた。土手には桜の木が植えてあったが，この土手が一塁側とネット裏スタンドになった。つまり三塁側のチームはいつも陽に灼かれていなければならないが，一塁側のチームは少なくとも自軍の攻撃中は桜の土手のつくる日陰の下で汗をふくことができる。あの夏の１日，三塁側に陣取った新道少年野球団はきっと死ぬほど辛かったろう。

「……決勝戦の６回ごろだったと思いますが，ベンチに戻ってぐったりしていると，さっと涼しくなりました。見ると，正ちゃんが僕の前に立って日陰をつくってくれているんです。正ちゃんにならってナインが僕の前に立ち始めました。これが12回まで続いたんです。僕が完投できたのは西日をさえぎってくれたあの日陰のおかげです。途中，常雄がふらふらっとしかけましたが，そのときも正ちゃんが言いました。『常雄も日陰に入れ。遠慮するな。これはキャプテン命令だぞ。』って。パレードのとき泣いていたのもうれしかったからです。自分たちは日陰なぞあり得ないところに，ちゃんと日陰をつくったんだぞ。このナインにはできないことはなにもないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちはいまでもどこかに残っていると思います。だから……。」

中村畳店から，わたしは外堀通りを市ケ谷へ向かった。金網越しに野球場を見ると，木枯らしに吹き上げられた砂煙がグラウンドを走り回っている。振り返って西を見ると，大会社の大きなビルが野球場に覆いかぶさるように立っていた。この十何年かのうちに，ここには西日が差さなくなってしまったようである。